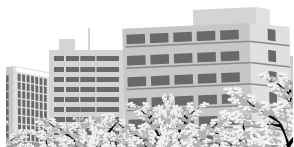


会員の広場



忘れえぬ女^{ひと}

高野 力(秋田)

一番古い記憶の一つに米軍の女性将校の存在がある。昭和26、27年頃の事だったと思う。近くの役場に彼女は部下が運転するジープでやってきた。青い目、ブロンド、ルージュ。そして目鼻立ちの整った顔。一瞬にして心を奪われ大変なショックを受けた記憶がある。

こんなに美しい女性が世の中にいるのかと。その時小生は4、5歳。近所のおばさんたちは皆モンペ姿だった。

運転手は見上げるような大男で、丸太のような太い腕はフサフサした金色の産毛で覆われていた。胸ポケットから覗くラッキーストライクの赤いデザインは富と権力の象徴のように格好よく強く見えた。車はめつたに通らない未舗装の狭い国道。排気ガスの匂いを嗅いでこれが文明だ、アメリカだと思っていた頃である。

隣の道川村からペンシルロケットが打ち上げられ、八郎潟の干拓が決定された昭和30年、隣家のお兄さんが海員学校を出て、神戸の商船会社に就職した。憧れの外国航路である。

2年に1か月ほどの長期休暇で帰省した。英

字新聞に無造作に包まれたおみやげはココア、タバコそしてチョコレート。見たこともない国に心は躍った。新聞には必ずロイ・リキテンスタインの挿絵があった。

お兄さんのみやげ話は夢の世界の事のようにまだに忘れられない。「アメリカでは学生が自動車で通学している」、「食糧などの買物は週末にスーパーマーケットで。通信販売も盛ん」、「新聞の半分は広告」と。

さらにどこの港町に上がっても「チャイナ」と呼ばれ、日本を知らない人も珍しくないと話していたことを懐かしく想い出す。あれから60年。気が付けば、アメリカのその時代の生活スタイルがそのまま今の自分の日常

になっている。

昭和33年、親戚のおじさんが20年ぶりにアメリカから帰国した。戦前漁業の出稼ぎで渡米したものの、開戦。帰国できず終戦直後も家族に物資が送られてきていたという。親戚一同職を立てて駅まで迎えに行った。幼少の時分から聞かされていた話は現実だった。奥さんは婆さんになっていた。彼は我が家でしみじみと「渡米した仲間が異国で深い、深い穴に葬られる時の思いは何とも言えない」と。あの頃のアメリカは遠かったが、もつと身近にあったような気もする。

幼少の頃の「衝撃的な出会い」から60数年経ったが今まであれほどの別嬪にお目にかかったことはない。おそらく今後もないだろう。